

あの頃の風景

おくのほそ道 第13回

温故知新の風を感じる 「小松市」



① 伝統的な建築様式の家屋が存在する材木町地区

元禄2(1689)年7月15日に金沢に到着した芭蕉は、滞在9日目の24日に小松に移動し、本折日吉神社の句会で表題にある小松への挨拶句を披露した。その後、山中温泉に行ったあと、再度小松を訪れている。同じ地を二度訪れたのはここ以外にはなく、芭蕉と小松の関係の深さを想像できる。

小松は加賀藩の基礎を築いた2代目藩主前田利常が寛永17(1640)年に隠居した場所である。利常はまず小松城を大幅に拡張し、郊外にあった寺や神社を小松城の周辺に集め、町の中心を東西に流れる九竜橋川を境とする橋北と橋南の地区それぞれに神社を鎮守した。これには寺院の取り締まり、参拝による町の賑わいを創出する等の狙いがあったと考えられている。また、美術工芸の名匠を多く招くとともに、伝統文化の礎を築

いた。さらに、産業を奨励し、特に絹織物は京都に職人を派遣して研究させ、多くの富が小松にもたらされた。

こうして町人文化の華が開き、小松で最も有名な曳山子供歌舞伎が明和3(1766)年頃から始まった。市内の8つの町が曳山を所有し、毎年5月に上演される「お旅まつり」では、曳山の舞台上で演じられる子供歌舞伎に約20万人の観光客が魅了される。一方、市西部にある日本海を望む安宅は、兄源頼朝の追手を逃れ奥州に向かう弟義経一行の前に立ちはだかった関所として知られ、歌舞伎十八番の演目で最も有名な『勧進帳』の舞台である。これも毎年5月の子供歌舞伎フェスティバルで小中学生らによって演じられている。まさに5月は「歌舞伎のまち 小松」が賑わう。

九竜橋川に沿う河岸端通りは、祭りの時期になると



②(上) 現在の小松市公会堂から望む市役所前通り

③(左) 昭和34年当時の小松市中心部

④(右) 戦後の河岸端通り

⑤(下) 現在の河岸端通り



露天が並び、江戸時代から最も賑わっていた。この通りにある京町交差点は、かつて藩の法度や掟書を掲示する高札場があり「札の辻」と呼ばれていた。明治期には小松の中心として多数の旅館が軒を並べ繁栄していたが、昭和5年の橋北大火とその2年後の橋南大火により、小松の中心街は甚大な被害を受けた。これを教訓として町割の背割り部分に蔵を配置し、袖壁を設けるなどして延焼を防止した。太平洋戦争後にかけては生活必需品が配給制となり、河岸端通りには店が次々と開かれ賑わった。昭和40年代になると北陸本線と立体交差して国道8号(現国道305号)につながる道路が完成し、同時に商業ビルも建設され、橋北地区の近代化が進められた。平成に入ると北陸本線が連続立体交差事業で高架となり陸橋が撤去され、河岸端通りは小松の玄関口として重要な4車線の幹線道路となっている。

河岸端通り近くの中心市街地には、「こまつ町家」と表札が掲げられた約1,100軒の伝統的な建築様式の家

屋が存在し、寺院などとともに町人文化が栄えた時代の面影を残している。特に材木町地区では小松市と『景観まちづくり協定』が結ばれ、多くの町屋が保存されて、かつての風景が今も保たれている。

小松市では平成27年に『NEXT10年ビジョン』を策定し、国際都市を目指している。その一環として、小松駅を中心に駅東を未来タウン、駅西を伝統のまちとして改修を計画している。過去と未来が融合した温故知新を肌で感じることが出来る町である。

<参考文献>

- 1) 『図説 こまつ歴史』第10巻 小松市史編集委員会 2010年
- 2) 『目で見る小松・加賀の100年』池端大二 1994年 郷土出版社
- 3) 『新修小松市史 資料編 11 (民俗)』石川県小松市 2014年

<取材協力>

- 1) 小松市立博物館
- 2) 小松市立図書館

<写真提供>

- ①、②、⑤ 山上英之 ③、④ 小松市立博物館